見 聞 録

第 231 回アメリカ化学会春季年会

東京大学大学院 工学系研究科
化学システム工学専攻 教授　堂免 一成

上記年会が 2006 年 3 月 26 日から 30 日、ジョージア州アトランタにおいて開催された。その中の石油化学ディビジョンにおいて、”1st International Symposium on Hydrogen from Renewable Sources and Refinery Applications”と題する国際シンポジウムがペンシルバニア州立大学の Song 教授、大阪府立大学の安保教授らがオーガナイザーとなって開催された。国際シンポジュウムは日曜から火曜まで三日間行われ招待講演も含め 53 件の講演があり盛況であった。具体的にはバイオマスからの水素製造、水の直接分解による水素製造や水素を用いるクリーンな輸送などのトピックスに分かれていた。日本からは、安保正一教授(大阪府立大)、井上泰宣教授（長岡技科大）や執筆者らが参加して講演、ディスカッションを行った。ヨーロッパからもかなりの参加者があり講演後の討論も活発であった。特にアメリカの研究者やジャーナリストが研究内容を詳しく質問してきて、米国におけるソーラーハイドロジェンに関する関心の高さが伝わってきた。

会場はジョージア・コンベンションセンターであったが、アトランタオリンピックの記念公園に隣接しており、のんびりとした環境のよいところにあった。ただ、市街地は道を尋ねると必ずチップを要求される（チップをもらうために聞かれないのに道を教えに来る！）など、当地の雰囲気も十分に伝わってきた。

◆アトランタ記念公園内のアトランタオリンピック実行委員長の銅像にビールをすすめる井上教授◆